

南山城地域における弥生・古墳時代移行期の交流関係

——城陽市塚本東遺跡の土器分析を中心に——

長 友 朋 子
降 幡 順 子
浅 井 猛 宏
加 藤 晴 彦
清 原 啓 護

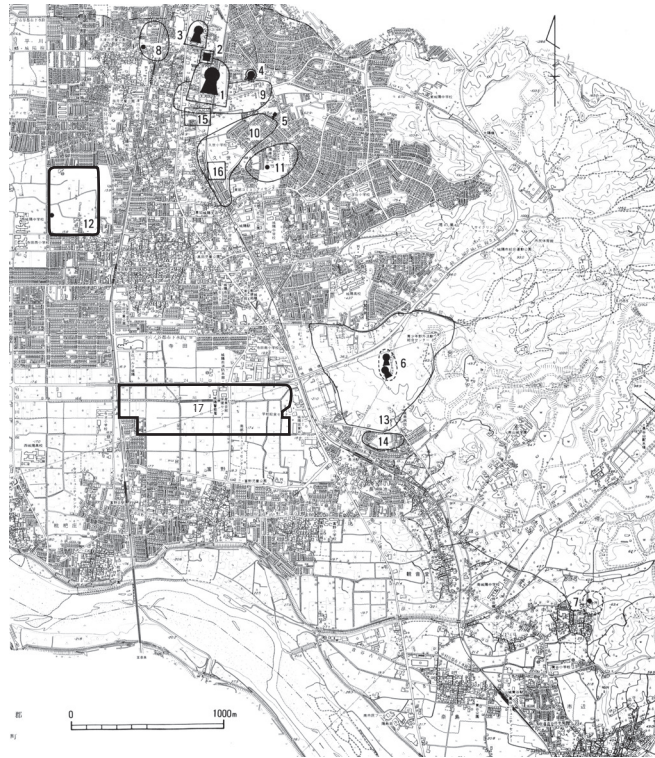
1. 弥生・古墳時代移行期における南山城地域

文字のない時代において、外来系土器は交流関係を知る重要な手がかりとなる。外来系土器から地域間の交流を、土器の模倣からは人の移住の実態を知ることができる。大型前方後円墳が築造される直前の弥生時代終末期になると、九州、吉備、畿内、山陰などの地域間で搬入土器や模倣土器が多く出土する。こうしたモノや人の移動の背景には、各地で台頭してきた地域首長が相互に交流し、広域のネットワークを形成するダイナミックな変化のあったことが想定される。この時、山城地域においても、外来系の土器が多く出土する佐山遺跡や内里八丁遺跡、木津川河床遺跡などの拠点的な遺跡が、桂川や賀茂川、宇治川、木津川が交わる旧巨椋池周辺 10 km ほどの範囲内に所在する。この時期に出現する塚本東遺跡もまた、外来系土器が多数出土することから注目されてきた。しかし、外来系土器が搬入品か模倣品かの判別は明確ではない点に、課題が残されている。そこで、本稿では土器の製作技術の観察と胎土分析をおこない、外来系土器が搬入品か模倣品かを明確にしたい。

(1) 山城地域の外来系土器と塚本東遺跡

山城地域では、弥生時代中期に近江地域の搬入土器と模倣土器が多く出土し、この時期に山城の人々は近江地域の人々と頻繁に交流し、ときに移住していたことがうかがえる。弥生時代後期になると、近江地域の土器の分布範囲は、南山城地域よりもさらに南の奈良盆地まで広がることから、山城地域を介して、近江地域と奈良盆地の人々の行き来の頻度が増したことを知ることができる。さらに、弥生時代終末期になると、山城地域では近江地域の土器に加え、丹後・北丹波地域の土器も一定量搬入する集落が出現する。塚本東遺跡もその一つであり、外来系土器の多数出土する遺跡として、注目されてきた。

南山城地域において、旧巨椋池へと北流する木津川は、約 18 km の南北に長い平野を形成し、淀川に合流する地点よりおよそ 8 km 南の木津川右岸に、塚本東遺跡が位置する（図 1）。塚本東遺跡が立地する平野で、近年高速道路建設にともなう発掘調査がおこなわれ、塚本東遺跡より約 1 km 南の木津川に接する下水主遺跡で、船着き場の可能性のある溝がみつき、下水主遺跡の東に位置する小樋尻遺跡では、古墳時代前期の大溝と祭祀をおこなった導水施設が発見された。木津川へアクセスする船着き場がつけられた弥生時代中期後葉を嚆矢として、後期から終末期にかけて



1. 久津川車塚古墳
2. 梶塚古墳
3. 芭蕉塚古墳
4. 丸塚古墳
5. 芝ヶ原古墳
6. 梅の子塚古墳群
7. 黒土古墳群
8. 室木遺跡
9. 横道遺跡
10. 芝ヶ原遺跡
11. 正道遺跡
12. 塚本東遺跡
13. 芝山遺跡
14. 森山遺跡
15. 平川廃寺
16. 久世廃寺
17. 小樋尻遺跡

図1 塚本遺跡遺跡の位置と地理的環境

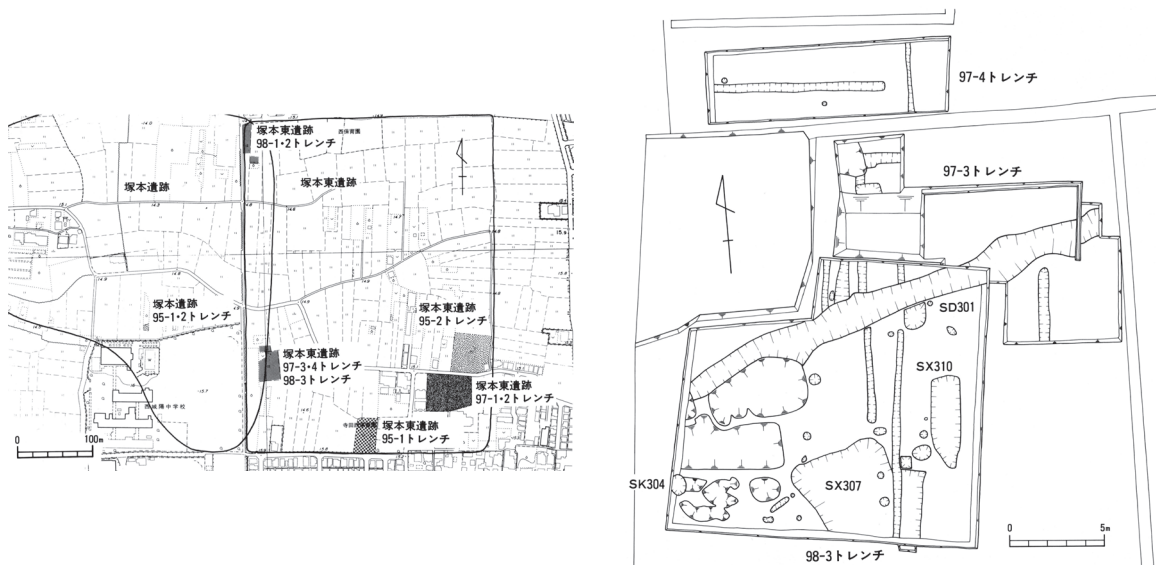


図2 塚本東遺跡のトレンチ配置図(左)と97-3・4、98-3トレンチ遺構図(右)

当該平野が開発されたことがわかってきた。

塚本東遺跡もこの土地開発の過程で形成されたと理解できる。塚本東遺跡は1995、1997、1998年度に調査がおこなわれ、住居(SX307)が1棟確認され、1997年度の調査では住居の北に人為的に掘削された溝(SD301)が見つかった(図2)。1998年度にはさらに調査範囲を拡張して溝が調査され、この溝(SD301)からは、多量の在地土器とともに、一定数の外来系土器が出土した。

2. 塚本東遺跡の土器分析

塚本東遺跡の溝から出土し報告書に図面の掲載された 89 点の土器のうち、外来系土器は 22 点を占める。河内系が 3 点、近江系が 4 点、丹後・北丹波系が 15 点報告され、丹後・北丹波系が最も多い。これらの土器について、本稿では考古学的検討と胎土の理化学的分析の双方から検討をおこないたい。胎土の分析と解析は、降幡順子が京都国立博物館に設置された蛍光 X 線分析機器によりおこなう。考古学的検討は長友朋子がおこなった。

なお、塚本東遺跡の丹後・北丹波系土器と比較するため、丹後地域に所在する与謝野町解谷遺跡の土器も分析をおこなった。解谷遺跡の分析対象土器は、2010 年 10 月に与謝野町により調査された、活断層調査第 2 地点の大溝 SD01 最下層から一括出土した土器の一部である。

(1) 土器の考古学的分析

塚本東遺跡の溝 SD301 から出土した土器の概要は、以下の通りである（図 3）。

在地土器 甕、蓋、高杯、器台、鉢、壺、手焙形土器が報告されている。そのほか、水差形土器と報告された異形土器がある。

甕は小さな平底を呈する。頸部をくの字に強く屈曲させるもの（図 3-1・2）と、弱く外反するものの二者がある（図 3-33～37）。前者は外面を叩き技法で仕上げ、後者はナデ調整やハケ調整で仕上げるものが多い。例外も少数ある（図 3-31）。叩き目には左上がりと右上がりの両方あるが、右上がりが主体を占める。甕のサイズには、器高 26 cm 程度の大形品と、22 cm 程度の中形品、8～12 cm 程度の小形品があり、前者は大中型が多く、後者は中小型が多い。2 点報告された蓋は、摘み部があり直線的に開く形態を呈する。

高杯は、杯部が強く屈曲して直線的に外反する。杯部との接合部で強く絞った脚部は、一度屈曲して裾端へと直線的に開く。また、脚部には小さな円形の孔を穿つ。器台は、小型で直線的に開く口縁部と、やや内湾する裾部をもつ。鉢は、直口の単純な形態を呈し、うち 2 点は底に穴を穿つ。杯部が屈曲して外反する、脚付きの鉢もある。高杯の脚とは別に、鉢の底部の底を上げたような、低い脚もみられる。

壺は数器種あり、直口壺と広口壺、二重口縁壺に分けられる。多くはミガキ調整で仕上げられ無文であるが、二重口縁部を中心に、装飾される壺もある。口縁部に円形の浮文が貼り付けられ、波状や直線、列点の櫛描文で施文される。

河内系土器 大形と中形の 3 点の甕が、河内系である（図 3-16・17・18）。頸部をくの字状に強く屈曲し、外面を叩き技法で仕上げる。16 は鉢形に成形したのち、少し乾燥させてからさらに胴部に粘土紐を積み上げる、いわゆる分割成形という技法で製作される。口縁部にわずかに面をもち、胴部外面には右上がりの併行叩き目がある。17 と 18 は器壁が薄くシャープで、左上がりの平行叩き目が観察される。

近江系土器 おおむね中形程度の 4 点の甕が近江系である（図 3-38～41）。口縁部を受け口状に強く屈曲させるという形態的特徴があり、口縁部の端部はわずかに面を持つ。38 と 39 の胴部は叩き目が表出しており、40 と 41 はナデ調整で仕上げられている。

丹後・北丹波系土器 15 点の内訳は、甕 9 点、高杯 1 点、器台 2 点、鉢 2 点である。甕のみの

河内系土器や近江系土器に対して、多器種が製作されている。甕には、大・中・小形品がある。底部は小さな平底または尖底で、在地の甕よりも尖底傾向が強い。口縁部は緩やかに受け口状になり、口縁端部は丸くおさめる点で、近江系土器と異なる。胴部外面には明瞭な叩き目が表出している。

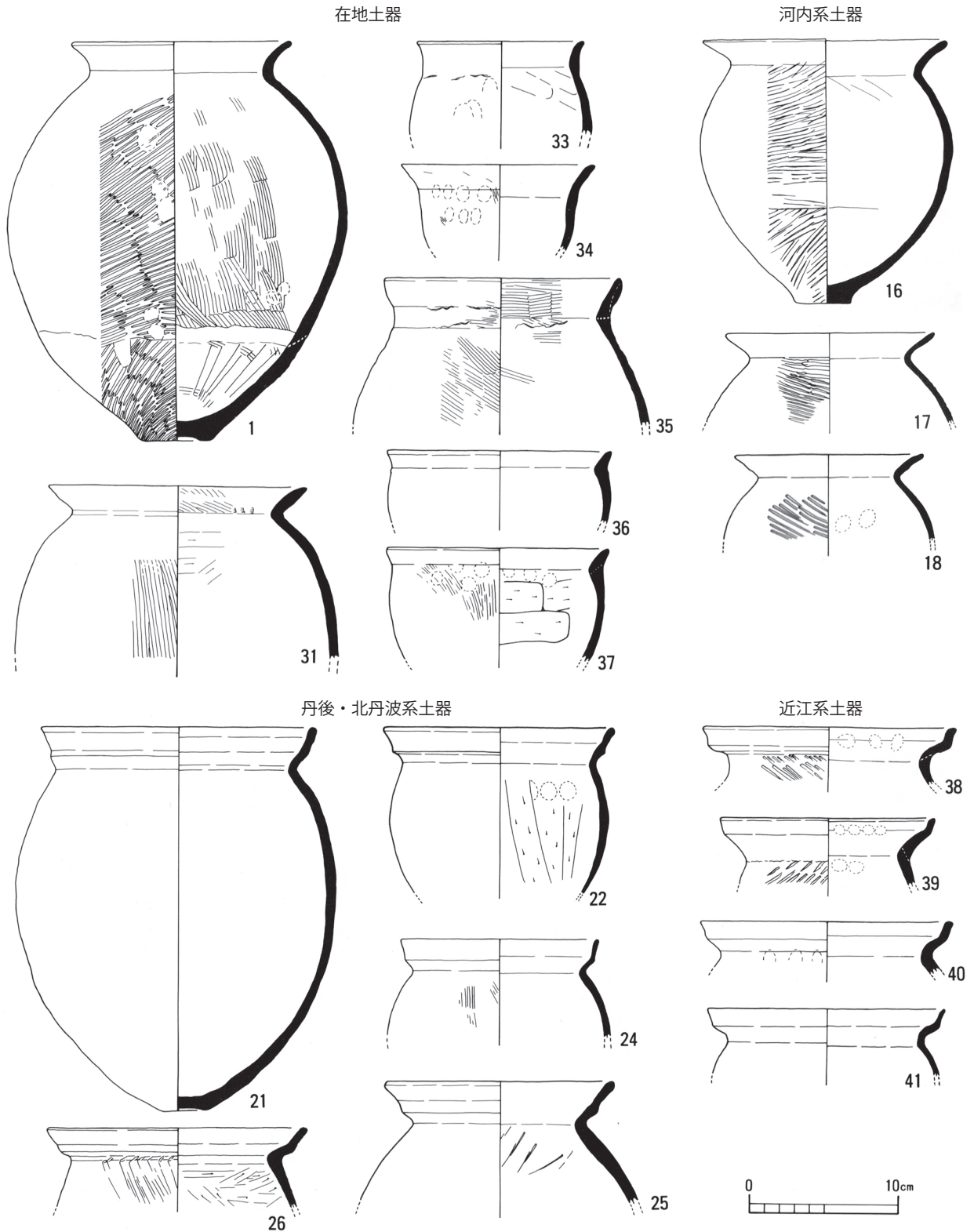


図3 塚本東遺跡出土土器の分析対象土器（土器番号は、城陽市教育委員会 2000 に同じ）

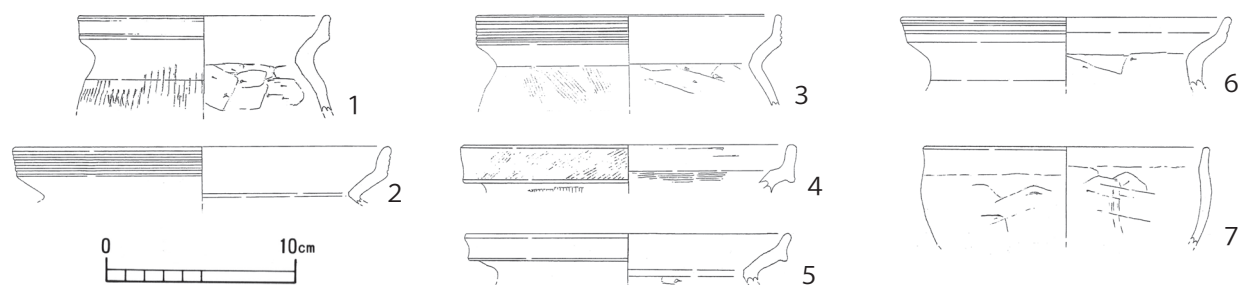


図4 解谷遺跡出土土器（土器番号は、表1と同じ）

おらず、内面を削るものもある（図3-22・26）。高杯は、杯部に段のある特徴的な形態を呈する。器台も口縁部に屈曲があり、口縁端部を刻みで装飾する。鉢も受け口状の段がある。このように、甕、高杯、器台、鉢の口縁部の形態が共通しており、丹後・北丹波地域の特色を顕著に表す。

与謝野町解谷遺跡出土土器で分析したものは、甕口縁部12点、鉢口縁部1点、杯部1点の合計14点である（図4・6）。このうち、資料1～5,6,9については、実測図を表した。甕はいずれも口縁部が受け口状に屈曲し、短く立ち上がる形態を呈する。胴部は外面を刷毛調整し、内面を削って薄くする。口縁部は、屈曲させたのちナデ調整で仕上げる。口縁部の立ち上がり部外面は、無文の場合（図4・6-1,4,5,6）と楯状の工具で強く横方向に施す擬凹線文を施す場合（図4・6-2,3,図6-B,C,D,E,F,G）がある。図6-Cは胴部外面の刷毛調整と内面の削り調整の後に、磨きを施して仕上げている点で、ほかとやや異なる。

解谷遺跡の甕の口縁部の屈曲は強く明瞭であるのに対し、塚本東遺跡の丹後・北丹波系甕は、口縁部の屈曲が緩くなっており、概ね共通した形態的特徴を持つものの、細部において塚本東遺跡の甕との違いが認められる。

(2) 胎土の理化学的分析

塚本東遺跡の外来系土器と在地土器との比較を行い、さらに、丹後・北丹波系土器の製作地を知るために、丹後地域の与謝野町解谷遺跡出土土器とも比較をおこなう。

胎土分析に際しては、まず表面に付着した埋土などのクリーニングを行った。その後、微量ではあるが、製作技法の観察などに支障を及ぼさない箇所を選定し、サンプリングを実施した。胎土分析は微量資料によって実施していることから、得られた化学組成は主としてマトリックス部の特徴を反映していると考えられる。

使用した装置は蛍光X線分析装置EAGLE III（EDAX製）、測定条件は管電圧30kV、管電流1000 μ A、X線照射径300 μ m、測定時間300秒、ターゲットRh、真空雰囲気中である。定量分析の標準試料には産業技術総合研究所地質調査総合センター岩石標準試料JB-1a、JF-1、JF-2、JG-1a、JG-3、JGb-1、JGb-2、JR-1および窯業協会標準試料（R701）を用い、検出元素の各酸化物の合計が100wt%になるよう規格化しFP法によって定量値を求めた。分析は1資料に対し3回測定し平均値をとっている。

酸化アルミニウム・酸化鉄（図5上・表1） 塚本東遺跡の在地土器は、酸化アルミニウムが15.6～22.8wt%（以下%と表記）、酸化鉄が3.9～8.0%である。近江系土器と丹後・北丹波系土器の値は、概ね在地土器の値が分布する範囲内におさまるが、河内系土器は、酸化鉄の値が高く、大きく分布

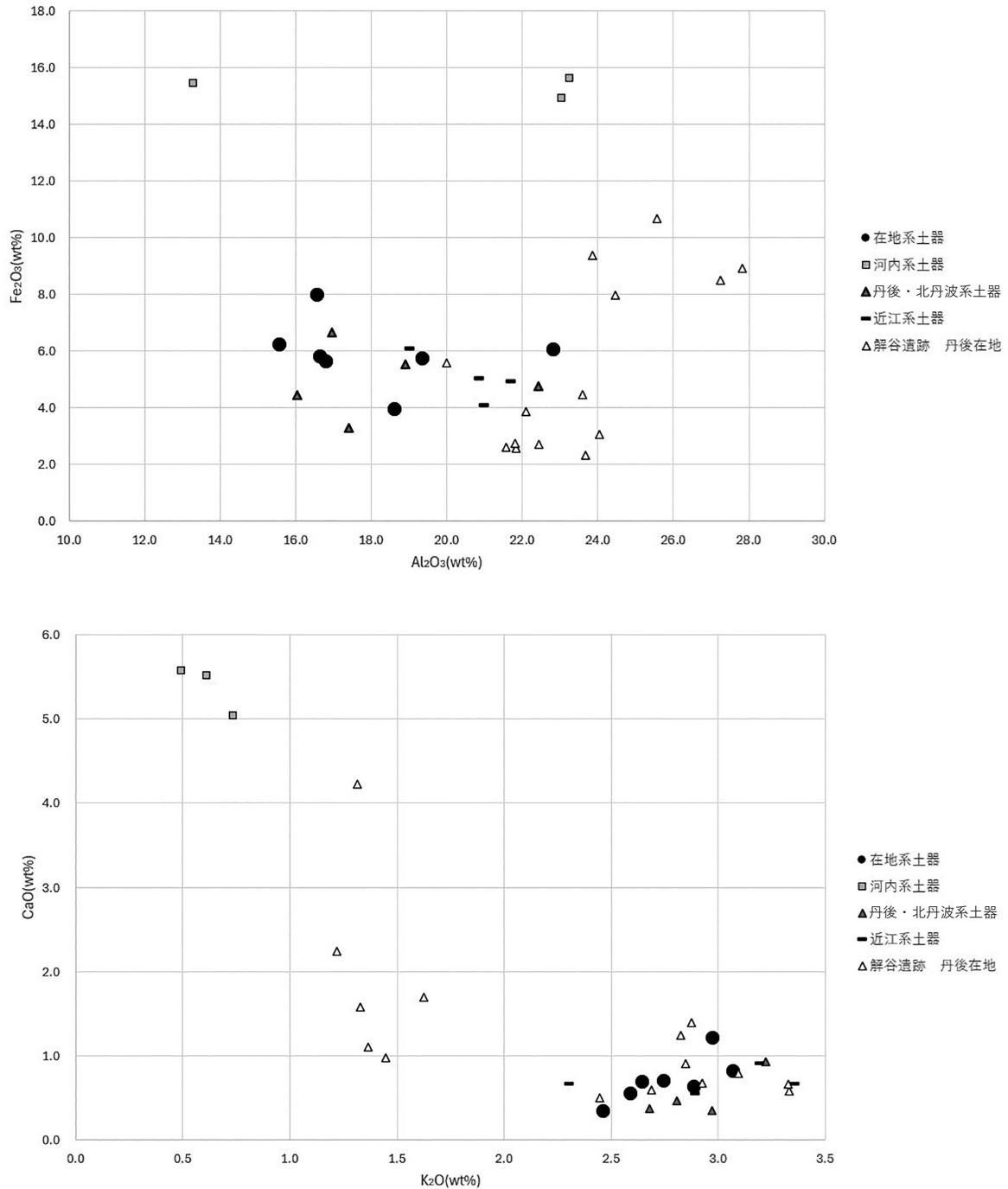


図5 塚本東遺跡と解谷遺跡の土器胎土分析

範囲が異なることがわかる。次に、丹後地域の与謝野町解谷遺跡の土器の分析値をみると、大きく2つのグループに分かれる。酸化鉄が6.0%以下のグループと、8.0%以上のグループである。後者のグループは、酸化アルミニウムが23.9%以上であり、在地土器の分布範囲とは大きく異なる。前者は、酸化アルミニウムが21.6%以上であり、やはり在地土器の範囲とはやや異なる。そのため、在地土器と分布範囲の重複する、塚本東遺跡の丹後・北丹波系土器は、解谷遺跡の値が示す範囲とは異なる。

酸化カリウム・酸化カルシウム (図5下・表1) 次に、酸化カリウム・酸化カルシウムのグラフ

をみると、塚本東遺跡の在り土器は酸化カリウムが2.5～3.1%、酸化カルシウムは0.34～1.2%の範囲におさまる。これに対し、近江系土器と丹後・北丹波系土器の値は、在り土器の範囲から大きく逸脱しない。一方、河内系土器は、酸化カリウムの値が0.49～0.74%と在り土器よりも低く、酸化カルシウムは5.0～5.6%と在り土器よりも高いため、グラフをみると在り土器の分布範囲とは大きく異なるといえる。以上のように、河内系土器は塚本東遺跡の在り土器とは異なる値を示し、近江系と丹後・北丹波系土器は在り土器の胎土と類似した値を示す。

表1 塚本東遺跡と与謝野町の遺跡出土土器の胎土分析結果

塚本東遺跡

No.	土器分類	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃
No.1	在り土器	0.18	0.33	15.6	73.1	2.6	0.55	1.4	0.06	6.2
No.31	在り土器	0.17	0.77	19.4	69.3	2.6	0.69	1.2	0.06	5.8
No.33	在り土器	0.49	0.43	16.7	71.8	2.7	0.70	1.0	0.04	6.1
No.34	在り土器	0.19	0.29	22.8	68.8	2.5	0.34	1.1	tr	3.9
No.35	在り土器	0.55	0.64	18.6	66.5	3.0	1.2	1.4	0.07	8.0
No.36	在り土器	0.43	0.62	16.6	72.2	2.9	0.63	1.0	0.04	5.6
No.37	在り土器	0.24	0.59	16.8	71.7	3.1	0.82	0.92	0.05	5.7
No.16	河内系土器	0.15	9.2	13.3	55.3	0.74	5.0	0.60	0.26	15.4
No.17	河内系土器	0.18	2.4	23.3	51.5	0.61	5.5	0.58	0.26	15.6
No.18	河内系土器	0.20	3.0	23.0	52.0	0.49	5.6	0.53	0.23	14.9
No.21	丹後・北丹波系土器	0.15	0.60	22.4	68.2	2.2	0.59	1.0	tr	4.8
No.22	丹後・北丹波系土器	0.08	0.13	16.0	74.8	3.0	0.36	1.1	tr	4.5
No.24	丹後・北丹波系土器	tr	0.19	18.9	70.9	2.8	0.47	1.2	tr	5.5
No.25	丹後・北丹波系土器	0.79	0.53	17.0	69.5	3.2	0.93	1.4	tr	6.6
No.26	丹後・北丹波系土器	0.24	0.30	17.4	74.3	2.7	0.37	1.4	tr	3.3
No.38	近江系土器	0.40	0.41	21.0	68.9	3.2	0.91	1.1	0.04	4.1
No.39	近江系土器	0.40	0.48	19.0	66.9	3.4	0.67	1.3	0.04	6.1
No.40	近江系土器	0.16	0.46	20.8	69.3	2.3	0.66	1.1	0.08	5.0
No.41	近江系土器	0.05	0.16	21.7	68.2	2.9	0.55	1.5	tr	5.0

与謝野町大風呂南墳墓群、解谷遺跡

No.	選跡	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃
大風呂南4	大風呂南 丹後在り地	0.19	0.58	22.1	68.9	2.7	0.60	1.0	tr	3.9
解谷A	解谷 丹後在り地	0.20	0.53	23.9	58.1	1.3	4.2	2.2	0.13	9.4
解谷B	解谷 丹後在り地	0.16	0.46	24.0	67.6	2.9	0.68	1.0	tr	3.1
解谷C	解谷 丹後在り地	0.21	0.63	20.0	68.4	1.4	1.1	2.7	tr	5.6
解谷D	解谷 丹後在り地	0.19	0.56	27.2	58.7	1.3	1.6	1.8	0.07	8.5
解谷E	解谷 丹後在り地	0.22	0.51	25.6	57.0	1.2	2.2	2.4	0.12	10.7
解谷F	解谷 丹後在り地	0.21	0.86	23.6	65.2	2.8	1.2	1.5	0.06	4.5
解谷G	解谷 丹後在り地	0.17	0.85	21.8	69.4	3.3	0.59	1.2	tr	2.6
解谷1	解谷 丹後在り地	0.27	0.51	22.4	69.2	2.8	0.91	1.1	tr	2.7
解谷2	解谷 丹後在り地	0.20	0.80	21.6	69.3	2.9	1.4	1.1	0.07	2.6
解谷3	解谷 丹後在り地	0.22	0.77	30.2	60.2	2.4	0.50	1.2	tr	4.4
解谷4	解谷 丹後在り地	0.24	0.65	21.8	69.1	3.3	0.67	1.4	0.06	2.7
解谷5	解谷 丹後在り地	0.15	0.49	27.8	57.5	1.6	1.7	1.7	0.07	8.9
解谷6	解谷 丹後在り地	0.26	0.57	23.7	68.1	3.1	0.80	1.1	tr	2.3
解谷9	解谷 丹後在り地	0.16	0.37	24.5	63.2	1.4	0.98	1.4	0.07	8.0

次に、丹後地域の与謝野町解谷遺跡の土器の分析値と比較した。解谷遺跡の土器の値は、やはり2グループに分かれた。酸化カリウムが1.6%よりも小さいグループと、2.4%以上のグループである。酸化カルシウムの値も考慮すると、前者は在地土器とは大きく値が異なるのに対し、後者は在地土器の値と重複する範囲にドットが分布する。

3. 土器からみた塚本東遺跡

理化学的分析と考古学的検討の結果を踏まえると、次のように考えられる。塚本東遺跡の河内系土器は、胎土が在地土器と異なり、製作技法も河内地域生駒西麓産土器と同様であるので、河内地域生駒山西麓周辺から搬入された可能性が高い。一方、塚本東遺跡の丹後・北丹波系土器は、胎土が在地土器と類似し、丹後地域の解谷遺跡甕とは口縁部の細部形態に違いが認められた。胎土分析でも、丹後地域解谷遺跡の甕とは異なることがわかった。したがって、塚本東遺跡の丹後・北丹波系土器は、丹後・北丹波地域の人々が木津川右岸に位置する塚本東遺跡に移動して、遺跡の周辺で丹後・北丹波系土器を製作した可能性が高い。また、甕口縁部形態の細部において、丹後地域解谷遺跡とは違いがあるので、塚本東遺跡周辺で丹後・北丹波系土器を製作した人々のなかには、丹後・北丹波地域の土器を模倣して製作した在地の人々もいたのだろう。外来系土器のなかで、丹後・北丹波系土器の数が突出して多い点、甕だけでなく、高杯や器台、鉢など多種にわたる点も、丹後・北丹波地域の人々が塚本東遺跡へやってきて製作したという理解と整合的である。

近江系土器については、理化学的分析で在地胎土と値が重複する一方で、製作技法において、叩き目が表出し、近江地域の甕と仕上げ方に違いがみられる。そのため、近江地域の人々が移動して、塚本東遺跡の周辺で製作した可能性がある。近江地域の土器の胎土との比較をすると、さらに確度の高い結果が得られるだろう。

以上、河内地域や近江地域の土器が出土することから、塚本東遺跡周辺に居住する人々は、東西の地域の人々と交流をおこなっていたことがわかった。1章で述べた通り、弥生時代中期から山城地域においては近江地域の土器が継続してみられ、量が多く在地で製作された模倣土器もあることから、移住も想定されるような緊密な交流がうかがえる。一方、河内地域の土器は、山城地域において、拠点的な集落や墓を中心に、弥生時代前期、中期、後期に少量搬入されており、土器が持ち運ばれ人々が往来するような交流があったのだろう。このような、弥生時代後期以前からの近江や河内の地域との交流に対し、丹後・北丹波地域の土器は、南山城地域において弥生時代後期までほとんど見られなかった。本稿の分析を通じて、弥生時代から古墳時代へと移行するこの時期に、日本海岸に通じる丹後・北丹波の地域から木津川流域にある塚本東遺跡へ土器が入り、人々が移動してくることが明確になった。丹後地域は弥生時代後期から墳墓への副葬習俗が始まり、近畿地方のなかの他の地域よりも副葬習俗の導入が早い。なかでも鉄器の副葬されることから、鉄器の流通網の一端に位置し、山陰地域や北部九州地域を介して、朝鮮半島南岸との恒常的な交流を維持していた可能性が高い。そのような交流網をもつ人々が、弥生時代終末期に南山城まで南下し木津川流域に位置する塚本東遺跡周辺に居住したのである。これが、古墳時代が始まる直前であったのは偶然ではないのだろう。



図6 解谷遺跡出土土器（左は外面、右は内面）

謝辞

熱心に学生を指導され、長年研究室を支えてこられた木立先生に、心より感謝しご退職をお祝い申し上げます。また、多忙な中、胎土分析をしていただいた降幡氏、塚本東遺跡の土器の胎土分析を承諾してくださった城陽市、大風呂南墳墓群・解谷遺跡の土器を提供いただいた与謝野町にも御礼申し上げます。

参考文献

小泉裕司 2000 「I. 塚本東遺跡の調査」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第38集、城陽市教育委員会
高野陽子 2021 「山城地域における椿井大塚山古墳出現前後の集落動態」『椿井大塚山古墳と久津川古墳群』広瀬和雄・梅本康広編、雄山閣

図版出典

図1 小泉 2000 を一部改変、図2 小泉 2000、図3 小泉 2000 図6 から分析対象土器を引用、図4 与謝野町より提供いただいた実測図より作成、図5・6 降幡順子作成、図7 長友朋子撮影

(長友 朋子 立命館大学文学部教授)

(降幡 順子 京都国立博物館保存科学室長)

(浅井 猛宏 城陽市教育委員会文化スポーツ振興課文化財係長)

(加藤 晴彦 与謝野町教育委員会社会教育課主幹)

(清原 啓護 与謝野町教育委員会社会教育課学芸員)

Interactions during the Transition Phase between the Yayoi and Kofun Periods in the
Southern Yamashiro Region:Focusing on Pottery Analysis from the
Tsukamoto Higashi Site in Joyo City

by

Tomoko NAGATOMO, Junko FURIHATA, Takehiro ASAI, Haruhiko KATO, Keigo KIYOHARA

The Tsukamoto Higashi Site, located in Jōyō City, Kyoto Prefecture, lies on the right bank of the Kizu River and is a site dating to the late Yayoi period. It is known that people across various regions engaged in active exchange during the transition period between the Yayoi and Kofun periods, and numerous pottery shards from other regions have also been excavated from the Tsukamoto Higashi Site. Not only pottery from the Kawachi and Ōmi traditions, but also pottery from the Tango and Tanba regions—rarely seen until the late Yayoi period—was found. However, it remained unclear whether the pottery had been transported or if people had migrated. Consequently, X-ray fluorescence analysis of the pottery and archaeological analysis were conducted. The results revealed that pottery had been transported from the Kawachi region, while people had migrated from the Tango and Tanba regions. It is also possible that people came from the Ōmi region. The people of Tango and Tanba had access to the ironware distribution network. Meanwhile, further south of the Tsukamoto Higashi site lies the Nara Basin, the base of the Yamato royal authority. As the people of the Nara Basin required ironware, the distribution network from the Tango region to the Nara Basin was strengthened. Consequently, it is therefore suggested that people from the Tango and Tanba regions migrated southwards just before the Kofun period and settled in the Kizu River basin.